

## 資料室だより 147

明治期 讃美歌・聖歌集成 手代木俊一監修 大空社

立教女学院短期大学から上記の貴重なシリーズ本が全42巻寄贈されましたのでご報告します。タイトルの通り明治時代讃美歌集の復刻版で正教、カトリック系、プロテスタント系すべてを網羅しております。プロテスタントは今と違って様々な派に別れており、20種類以上の分派を網羅しています。監修者の手代木俊一さんは讃美歌研究一筋に生きてこられた方で「日本の教会音楽（讃美歌・聖歌）関係資料目録」をフェリス女学院から刊行され、私もかつてはこの目録をもとにグレゴリオの家の所蔵チェックを行い、目録に記載なくグレゴリオの家で所蔵している資料を提示してリソースシェアを行っておりました。

手代木さんが序文で述べておられるように、日本では聖書研究に比べ、聖書と不可分である讃美歌研究はあまりなされてきませんでした。このたびのこの労作は音楽史、明治以降の洋楽受容史、キリスト教受容史のみならず、言語学史、文学史、日本文化史、日米交渉史、音声学上などでも資料的価値は高いものです。日本はキリスト教国ではありませんが、洋楽を受容している私たちの文化において宣教師たちの働きと諸外国から伝承されてきたキリスト教聖歌の文化的価値を無視することはできません。近代日本に与えた意味を総合的に研究しようとする際に基礎的な資料としてこの楽譜シリーズは比類のない価値を持っています。

特に私が感銘を受けるのは未発表の手書き聖歌など埋もれていた貴重な聖歌も収録されている11巻です。前半は明治13年(1880年)の手書き歌詞集です。美しい英字書体で一見すると外国詩にみえますが実は日本語のローマナイズしたものです。最初のページをみますと Spiritp Santo(これは日本語に翻訳しないらしい)[聖霊よ]キテ、シンジャドモ ヲ テラシ、ココロ モヤシ、、、という具合です。後半は「Cantus Sacri ad usum Alumnorum Seminarii Nagasakiensis」(1896年)、長崎のセミナリオで使用されていたと思われます。そのうちの半分はラテン語聖歌。しかしグレゴリオ聖歌中心ではありません。テキストは伝統的なものですが唱歌風のわかりやすい旋律がついています。O gloriosa Dominaのような隠れキリシタンが受け継いだ聖歌も新しく様々な旋律をつけています。後半は現行のカトリック聖歌集に引き継がれていく聖歌も多くありますがその文語調翻訳は、明治時代の長崎の信者の息遣いや霊性を感じさせます。

ここでもう一冊ご紹介したいのは資料室にすでに所蔵しております手代木氏の著作「讃美歌・聖歌と日本の近代」(音楽の友社)。これ上記の讃美歌集を検討していくうえで助けとなる著作です。さらに「資料集 外国人による初期日本の讃美歌に関する研究」が付されており併せてお読みになることをお勧めします。

(杉本ゆり 記)